研究の窓

福祉概念の再構成と福祉国家の経済システム

【旧】厚生経済学の創業の理念として，厚生経済学は人間生活の改善の道具だと宣言したアーサー・ピグーは，人間社会に関する科学は光明をもたらすものとしては余り強くひとを惹き付けるものではなく，光明よりは果実の期待こそ，主としてわれわれの関心に値するとも述べていた。ピグー以降の厚生経済学の展開は紆余曲折に満ちていて，彼の創業の理念とは懸け離れた抽象的理論の数学的精緻化が主流を占めた時期が長く続いたが，近年になって《血の通った厚生経済学》（ロバート・ソロー）が復権を遂げつつあることは，まことに喜ばしいかぎりである。この復権運動の旗手はアマルティア・センだが，功利主義の伝統も含めてピグーの遺産を継承して，《血の通った厚生経済学》の火種を絶やさなかったジェームス・ミードの貢献の意義も，忘れ去られてはならないと思われる。

ミードが1975年に著した『理性的急進主義者の経済政策』という小著には，すべての良識ある市民が共通にもっている社会的目標として，《適正な生活水準》・《適正な所得と富の分配》・《個人の自由》・《個人の安全》・《社会的決定への個人の参加》という社会的【善】のカタログが記されている。ミードが標榜する《理性的急進主義者》とは，これらの社会的【善】のカタログのなかで，《自由》と《平等》に優先的な価値を認める個人を指しているのである。

ところで，《最大多数の最大幸福》という功利主義的な【善】に優先する価値を《自由》と《平等》に認める立場は，社会的評価の一元的基準として個人的効用の社会的総和を採用して，施政者の役割は，社会・経済システムの的確な設計によって，ひとびとが専ら私利を追求しつつ結果的には最大多数の最大幸福を実現するように彼らを誘導することにあるという功利主義――およびその系譜に連なる【旧】厚生経済学――のシナリオを放棄して，人間生活の改善の道具を新たなシナリオに基づいて設計することを意味せざるを得ない。この事実を意識するからこそ，自由主義的な【善】にも功利主義的な【善】と併存する――ときにはそれに優先する――価値を認めた最初の厚生経済学者ジョン・ヒックスは，新たな立場の旗幟を鮮明にした『世界経済論』(1959年）の序文を《ひとつのマニフェスト》と称したのである。

《自由》と《平等》に優先的な価値を認める立場に依拠して，人間生活の改善の道具として福祉国家の経済システムを設計するという重要な作業は，ミードやセンの先駆的貢献によって道筋の輪郭を付けられたとはいえ，現在はまだ未完成な状況にあることは否めない。そもそも《自由》に優先的価値を認めるといっても，いかなる人間活動も全く他者の活動の妨げとならないほど完全に私的なものではありえないため，強者の自由は弱者の死を意味する可能性がある。したがって，あるひとの自由は他のひとの自由の抑制に基づかざるを得ない場合が，例外というよりは通則なのである。また，《平等》に優先的な価値を認めるといっても，福祉国家の経済システ

ムを設計するという具体的なコンテクストでこの価値にオペレーショナルな内容を与えようとすれば，平等論の哲学における2つの標準的な難問――（1）平等とはなにか（What is equality?）（2）なにに関する平等か（Equality of what?）――と正面から対決する必要に迫られることになる。

福祉概念の再構成と福祉国家の経済システムに関する現代的研究の歴史的コンテクストは，およそこのようなものである。ここがロードスだ，ここで跳べ。

鈴　村　興太郎
（すずむら・こうたろう　一橋大学経済研究所教授）